圓先大師傳

四十三之四

法然上人行狀畫圖第四十三

上人の勸化本願ぢにうなよゆへなり。この乃
ちゝへよりゝるがようの往生ねらげたる事。在
世こいひ。滅後といひ。都鄙のあひだ。それぞれを
ちゝ次筆墨を記しかづゝ。ゝりこいへども。
法流をひろむる遺弟よりも。慈訓をまゝを体
道俗よいるゝやうてぞれあゝり面受したて
まつれるにうぎてあゝく舊記よのゼロ實にそなはる

大曜文庫

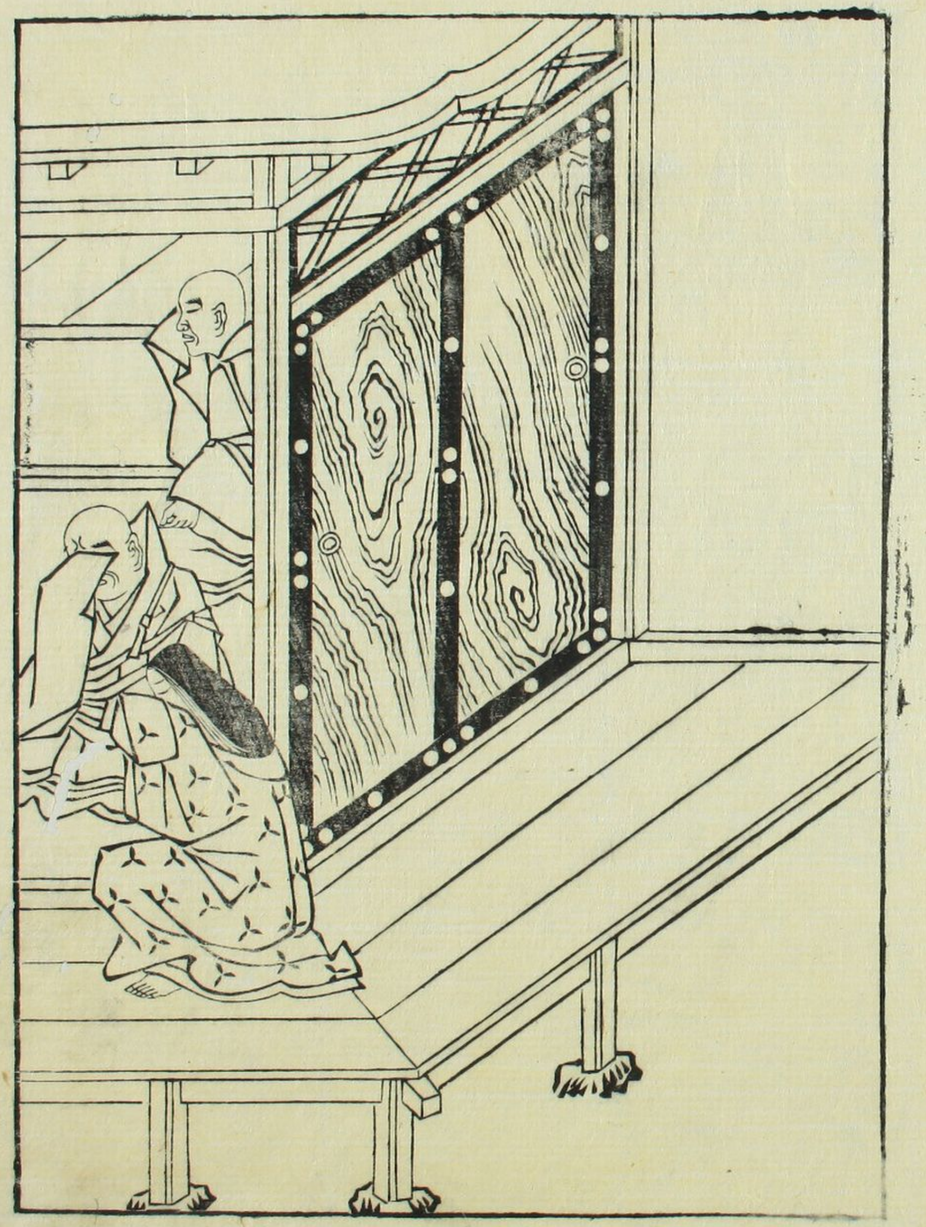
とこゝろあらためくそれ行状をきるすべゝ
上人化導の德とするにたまゝゆへなり
白川の法蓮房信空又号稱辨ハ中納言顯時卿の孫
左大辨行隆朝臣の長男なりこの人朝臣乃室
懷妊の時文中納言顯時卿申られけるハ汝この
妻室のうゑんをこゝろゑ男子なゝんから
なゝ汝我養子とすへゝこの室家月こらて
文安二年ゝ男子誕生ス中納言これをよろこ

こびて乳母ゝ酒肉五辛を禁ぜゝ養ひ
そゝぶゝて保元二年十二歳のとゝ墨染乃
布の衣袈裟をぞるゝ中にいまして黒谷の
叡空上人ゝをゝちかハす状云面謁乃時令
申俗小童登山俗髪著此法衣不歴名利
之学道速授出離之要道云云仍登山の翌日に
出家して薫修功たゝりて者ハ道德三
塔ゝきこえ名誉九重ゝなりゝ二條院ゝた

御歸依をあつくせり。叡宣上人
入滅の後は源宣上人に奉事して大乘圓
戒を相承し。又淨土の教門をなほし。念佛を
修してよろあり白毫後拜とこれひさり。
毗沙門堂の法印明禪に對面のことあるに。
法印たづね申ていはく。内外典よりて。
いづれも分明ところへ申ていたまし。所學の
程ゆゑもたぼえていうれる明師達なり。

あひたがへるもとこと問申ていはく。幼稚の
むしよりたづ法然上人の教訓をかうふれる
ほうきけるところなきよし申されたりこれ
ひとの手學の程をたりよ。師範上人の慧解の
分たるひあるれていとづくれたれば。
法印のらにかくられることなんぢはいよや。
法印但馬宮へ進せ申ていはくこれひ
ざわの事をは内外博通し。智行兼備せり。

念佛宗の先達傍若無人といへゝとそのせらるゝて侍る。行年八十三。安貞二年九月九日。九條の袈裟をうけ。頭北面西ゝて。上人の遺骨をむしにてをさめ。名号紙となへ称ふるゞくして往生疑とげらるゝよしなり



西仙房心寂ハ。叡宣上人の弟子たりしるゝ。
のちハ上人を師として。一向専修ノ行者と
なりよりわ。学生たるうへ道心をふかく
うハ上人をろかぬこたりひたまへ。
まゝる故西仙房心中よりたをく同朋同行
まゝてきあゝりハ。ことにふれてその難おほし。
たきもまゝ。おぢゝんところよりひらわるゝて。
まゝげうゝ念佛ぢんとれをひてさるへき所や

あるとたづねあわきをるほらて。河内國讃良
郡いぬゝゝろよあゝわをもきいひてこゆる
家あわなわそこれる人にたづねまゝて。あれ
家主ハ尾入道とてこれ邊の長者なり。あわ
ごゝき善人なてゝろ何ノ僧乃あつまる所
なりと申なる故きゝてゝの家よゆきて
いぬやうまゝばうれるゝゝろよ居て。後世乃
たらあをせたやとれひ行まゝを無縁の

をはして身命はきはまりて八道殿八善人よて
たいすたるにあはれやしの中に方丈はいかり
一はちわくれはにてもめくむをはを保し
孫たんやうはうちにこうり居て志はこうに
念佛し侍らんたくしに僧を歸依してをきた
きんとて心經一巻をもち固せうしい消息
一紙なわこもつけなとの孫くこきへうびゝ
あれへおいする事あるへう侍るのこく命

いけたまうんうの後八やまとやしは鳥きる
をはしはとこすはきたりし孫へとこの入道を
いたくうんるところあわたるはやいうりも
御房は仰られはは志はるゝふ面ゝゆえく心を
たゞへきてまつるへう侍ところへうまとは
らいをはしろいしうんこちきわをさて恵へ
うへものわわて所持は聖教ごををしへ人は
もちこうせくたくは水瓶ごうり後身り

きうくゝり。上人の草庵より集り。隠居乃所
存をのゝ今生ハ見ん系ハ只今ばかりなるを。
再會ハ極樂を期し侍へしとていでたちわ。
上人ばかりハいうやうにうそをいわれたるんと
の孫なる程より三年といぬるこれ人出来ぬを。
上人おどろきてあまをいふとの孫へい西仙房
申様それ事にハ非ず。くれ年ばかりハ世縁
俗念ハ心をこゝ留事をしぬゝハてゝく非

しうとゝそれ春よりわ徒然の心いできく。
いとゝ同朋同行ばかりき境界まてをを
こゝ徒然よたへぬまゝよハあり聖
教をひきんゝいなくちをてまゝなを。
人よゝ事ちへ後悔をゝれ剰をてハ。
時非時をゝふる小童なゝにしひてゝおよと
なきそゝ事成申て心をれくちめなを
していよくはをくれを。強盛よなり侍

しうは。故郷をはなれぬ心はほく。極樂を願ふ心はなくして。心ばせこゝろざしめて念佛申さんためにこそ。こゝろはまゝ。ぞくしうにまぎれぬ。故郷ばなれる心とは。たゞこうけんためにはあらず。ひたすら假名乃阿蘭若。すみくてをそなわるハ。なにの身のためにかなるべき。無益なすなるべしと。なげきて。へ道ハくるを申はでよげのわ。まて。ゆなりと申ゆれば。智者にも学生にも

ようの道心なきをれば。この心はなき事なりと。上人返〻随喜し給ひて。姉小路。白川殿の辻子といぬ所。妹の尼公乃侍なる。いわれうしろ。ひさうをはして。身ひらかれさむるほどに。ぞをもてゆひまいてそれうちにこを。ぞくうこれ衣を着し。食時便利のほうに。一向に念佛をぞ。小土器六ぞなべて。香ぞうを火をけさぞどうかし

ちうつうまく念佛しちゃ。人よも對面せず。
生涯ハ別時たりたゝ。はゝよ元久元年ゝ冬。
臨終正念ゝて。端座合掌ゝ高聲念佛する
こと數遍。念佛ゝ毛にていきたえぬゝ乃
あゝり五六町のうちゃ。異香芬馥と室ゝ内。
三年まてかうぐうるとなん。東山延年
寺ゝうへの山ゝ葬と。著るところゝ紙乃
哀異香ゝれゝつゝ。たゝ。ゝいるほ人。面こり

ゝつゝゝゝよたゝ。終焉ゝとき。貴賤男女ゝゝ
あゝゝゝて。結縁ゝたるたゝて。大番乃武士。
千葉ゝ六郎大夫瀧頼こゝを見てたちまちに
發心出家と。上人給仕ゝ弟子法阿弥陀佛こゝ
たゝ

嵯峨に正信房湛宣ハ德大寺に尼大臣實能の公
孫法眼圓實に真弟。大納言律師公全こなり。
瑜伽の壇乃うへハ四曼不離にしてふさ紙
をてあそび。觀念に窓のうちハ五相成身の
月をすまして。三密乃法將四明に智德たる
へき器用たりしに。實全僧正の附弟にそ
たのまれるぱちをうけ浮生に名利をいとふ
心祈んこころ。菩提の直路を孫ふこころさし

ぬるわけまこぼるる聖道門をすて上人の
弟子となりひとすちに浄土門よそいを引
たる間まれあり上人乃眼光に拜して後ハ
信仰こゝろふかく圓戒をたもつへて天下に和尚
たるべき稽古を事とし学問に単修をこ
のゝて学問選擇集よみすぐへゝ深ゝ宗
さとれる年たけ齢かゝるまゝに道心いよく
堅固にして専修功たゝり行德あゝ社なきハ
世こぞりてこれをたうとびき毗沙門堂乃
法印明禪寂後の知識よハこれ人をそりらる
らまこゝる嵯峨に二尊院ハ上人草庵をむすびて
かゝひ弦ゝ地なりそれ跡うゝくを土つく
居をこゝにたゝ寺院に興隆ゝ。楞厳雲林
両院の法則をうけしてゝ二十五三昧に勤行ゝ。
上人乃墳墓に建たてゝそれ遺德をそ
戀慕ゝ弦ゝる上人遷謫のときを配所まで

とゝなつ給ふる。御うつる見給たゆにして。舟の
うちにて上人の真影をうつしたてまつる。
なる。舟のうち給ふ御影とて。當時二尊院の
塔よりうつしとゝ給たり。生年七十八。建長五
年五月廿七日。所労の事有つゝ。同
七月廿七日。念佛數百遍。称ぬるこのごゝろ
終りよりち

播磨國。朝日山の信寂房。上人面授の弟子なり。
明惠上人摧邪輪といぬる文を作て。選擇集を破
せらるゝ。この人破文をはらわく。難者の非を
あらはせり。一この義立破分明なる中に。瑜伽
莊嚴等の論を引て難し。香象清涼等の釋を
あげて破せらるゝところの答よいとも。
うるはしく菩薩の解行をあらはせり。九支乃往
生をのぶ。難行易行それ心こゝにて。自力他力

それも別なり。経論の所説いづれも誠諦也
といへども。すでに時處對機利益各別なり。五
性各別の義をもて。一切皆成の旨成難でんや。
天台の学者これを信伏でんやいま萬行成佛の
論をもちて。念佛往生の義を難でんや。浄土の
行人これを依用でんや。上又念佛宗をたてん
とてもつて諸師よりあるゐまつる一師よりふ
宗義をとゐまつるゐ。難でゐれたるところを

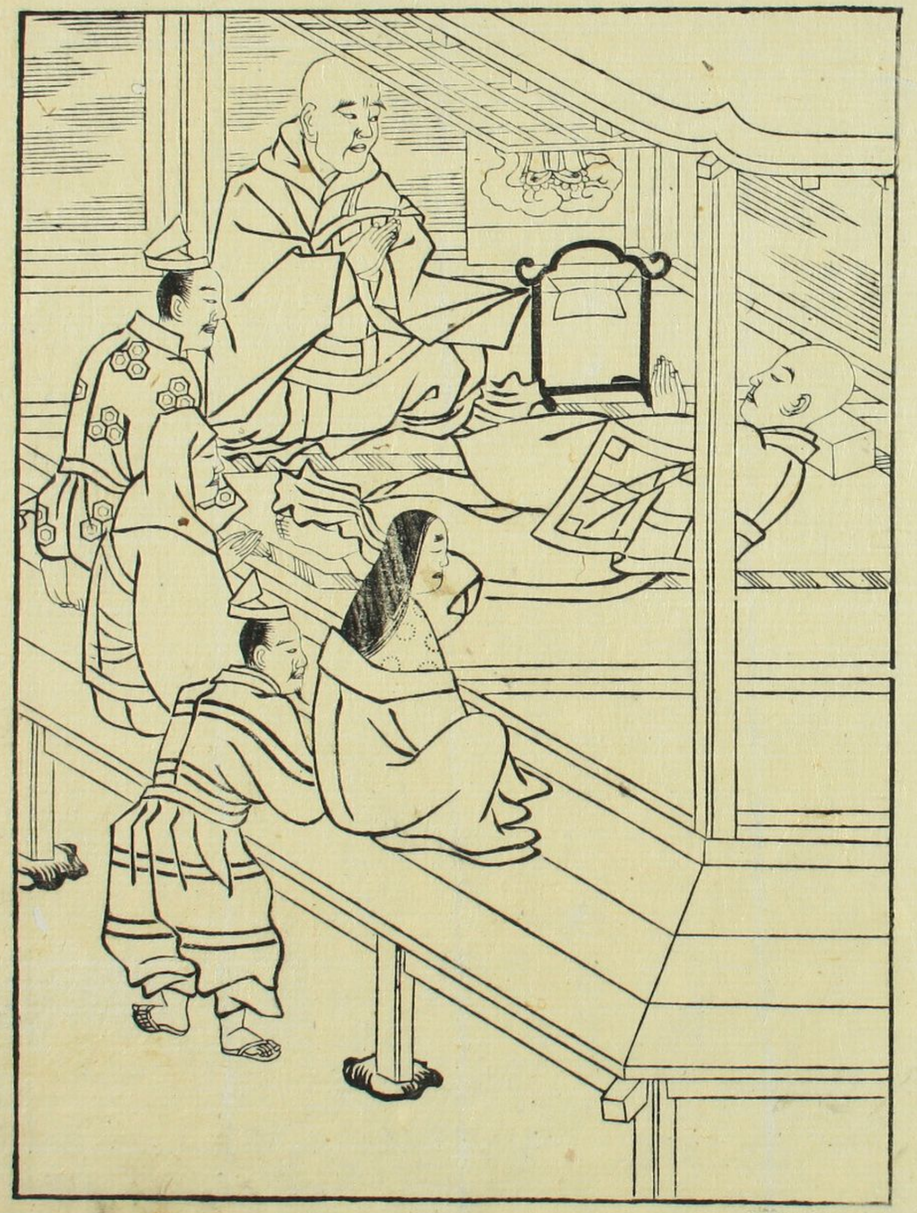
こゝろめるにいとゝ。諸師よりて一宗成
たゐまつるゐ。密宗の学者。顯宗の祖師よりも。
顯宗の学者密宗の祖師よりあるゐまつる。
まつるゐ。これ難きゐ。難者り天
台真言の祖師よりゐ華厳ゐれいち天台
真言の方便とたゐまつる。一宗義をたてん。
一宗のうちにをきて。先德たゐまつるといへども。
一師の釋義成もちて指南とする時ゐまつる

相違の師をもちゐる事は。已上九これ人内外
典によあきらかなりきぶちきはよや毗沙門堂の法印
明禪ハ上人乃没後よ選擇集をひらき見てこの
義を服膺あまわ。一巻の書に所存ものをを
ちらして落書の躰よて信寂房ハ鳥部野の
草庵よをくるとなん世よ述懐鈔といい
へるこれなりこれひごろ法門の大綱選擇集ハ
本ちらしてこの義をもうへる事一言も申ちき

ばらばらあなどちに練若ハすまひをこれを
ちるて俗塵をいといれざりちわ。遠江國横
路といぬ所よ待なる西蓮といぬ僧上洛して。
邊土乃利生をすすめ申よりて寛元二年ハ
妹のゝ花洛ハいてゝこの下向ハなき
二年正月癰瘡をわこ法門弟等療治をすゝめ
申といへもたるよこれをゆるちぶやうなく
危急にをよあひる食事ハらく免二月廿一日

なわ門弟におほせて別時念佛を修せしむ。
こゝに苦痛こゝろくるやこゝ瘡平復することゝ
なりのこゝろ人奇特に思をなして高聲念佛
時こゝ勇猛なり三月二日夜まゝ五
漸くよわれ卯のこゝめにいりて門弟を
しゝてよをなゝして高聲に念佛せしめて。
うれこゝろにたゝて念佛をこゝろ百餘遍こゝ
こゝまりてのち脣舌をうごかこと七八遍。

すれいらいきたえんとなるこゝなん



醍醐の乗願房宗源号竹谷は上人よりの法義を
ゆくるること多年なるよりぬく隠遁をこれを
道念深くして醫師はなのりまるを
音律はこれとなれそ人よりかるれる然を
らもその德くまたなりてある貴女御歸依
ぬくまたるこのある時沈の念珠を拜領せれ
たりるを自愛してこれ念珠よりて晝夜よ
念佛せるれるにいまるこの人は事後も主

ちなる修行者一人雲居寺に通夜したり
なるに。ひるまぐろわるに。堂はまへり。山臥
いとゝといぬるともなく。法あつまりゝく。いひ
しろめる事なきなり。いうぐして醍醐の乗願房の
出離を障导すべきといふよ。一人の山臥は
沈の念珠は由来をとりてこれ念珠をたより
ゝて。出離なさはゝく面ゝといぬとてはりひて。
夢ちあぬこゝちまあやしくれば。えゝく。傍

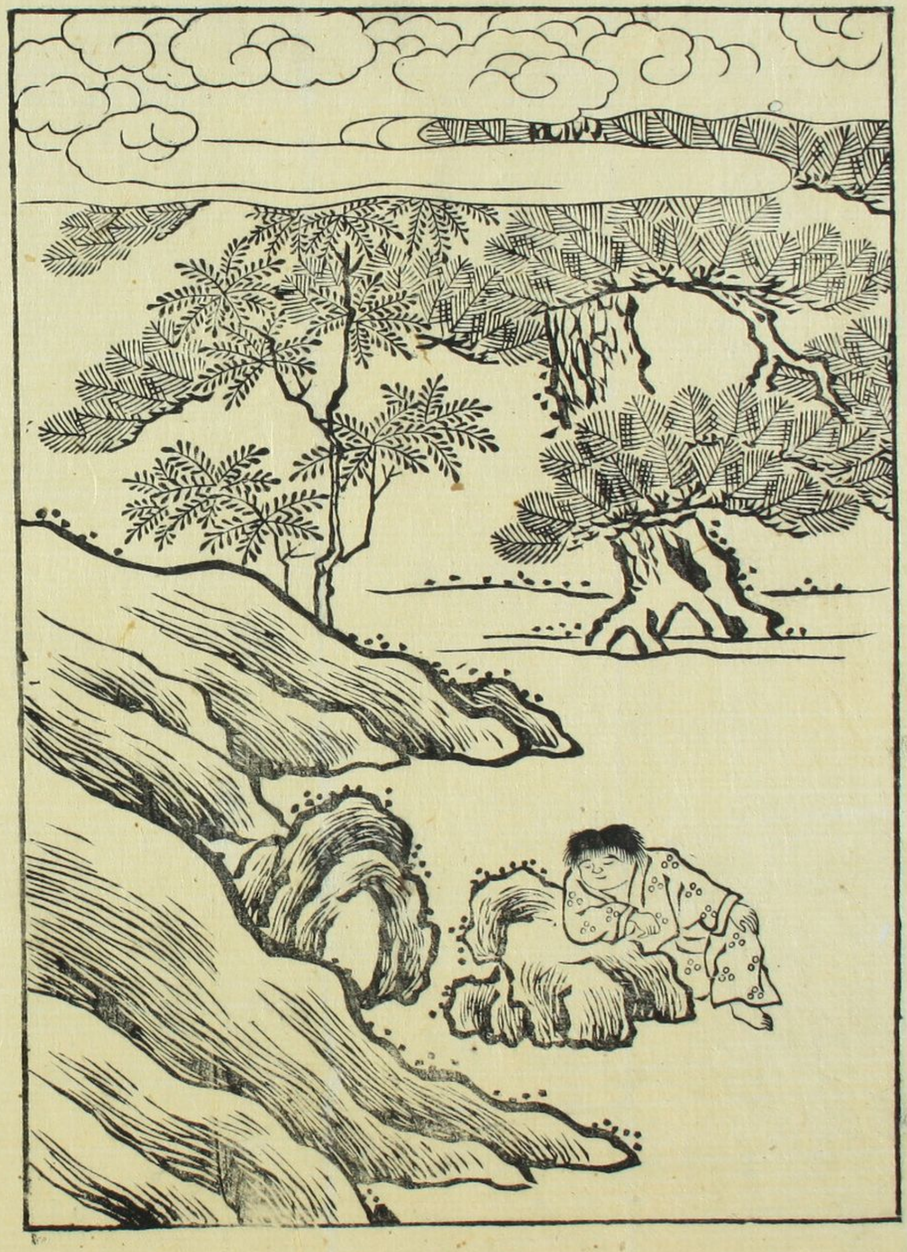
なる人よたづねるにぢる人ありといひしなれと
うは庵室よりゆきく極めは虚實なし
きゝんためよりけるそこれる人よの念珠乃由
来をたづねるにぢるもづいちゝなれと修行者
奇特乃恩をなりて見參にいるべきよりなし
案内するにいきて對面あゝゝ。修行者と
かくは事をいゝなりぢ。ぢをゝゝてもちたまへる
念珠をうばひとりて。次中よりなげいれよゝ。

乗願房たどるまきてゝこの心をたゞしらゝに。
修行者夢ゝ次第をくゝまかりてゝこゝろ
申ゝゝしゝいとゝくゝろこゝまたゝぱゝくく
生死をいでゝゝへき人をゝ魔界をひく障
導ゝ方便をなすゝゝたゝくゝゝ事にて侍る。
ある時人ゝひていくく悪を行ゝ往生淨土ゝ
業はゝ因えゝ俱はぬくゝてを往生とゝゝ侍なん
やゝゝ答云ゝゝゝ人のゝゝひなり猛利熾盛の

心なるゝゝゝゝにゝすゝ次相續して行
すゝゝゝ往生ゝゝるなりゝゝゝゝ俱舎ゝ性相ゝ。
由重感淨心及是恒所作といひてゝゝゝり
なゝゝ事ゝ定業を成ゝといゝゝあるなりゝゝ
申ゝゝゝゝるゝゝゝあるゝゝいくく世間ゝ人の
意ゝ相叶ゝゝゝ大力ゝゝゝゝゝけゝゝゝ。
夜枕ゝゝたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

それ定より。念佛真實より信じたるをもいいて
ときどきたるひて。信力内より發したる
ゆへより。名号よりいさぎよく鎮よこれよりち
かうたるやうにぞ申さるべきなりと。云云これ
ひとつわをとい真言師悉曇師よりて。仁和寺に
すまれたるう。のちよハ天台宗を稽古せられ
たまはらをこの兩宗よりて順次より生死をいぢ
あらもおほえぬらく。上人の弟子になり。

遁世して。醍醐の菩提寺のたく樹下の谷と
いぬところより。隱居多年の後清水の竹谷と
いふ所へうはをすまれたるこの。建長三年七月
三日戌剋より。生年八十四りて。往生し給ふ



止

法然上人行狀畫圖第四十四

長樂寺の律師隆寛（又号無我稱皆空）ハ。粟田の關白五代の後亂少納言資隆の三男なり。範源法印の附法として。慈鎮和尚乃門弟よりてゝ。天台の法燈をつゞけ。叡山の領袖たりといへども。ものゝ面き宿善やをらんゝ。浮生の名利をいとひ。安養の往生を願ひてゝ。上人の禪室に參ゝ。出離の要道をたゝ申

ちれきぶん〜えんよいいとうちらけ弥ざりなれ
らも往生れ志こうきょう弥んごろよ述弥なれ。
上人おほきよたどろきて當時聖道門乃有
職よて大僧正御房慈鎮和尚より貴重でうれ弥ぬ
御身れ。れほらて思いき弥なる事。返こもあわ
がくくそて思たまふきらて浄土れ法門弥ん
ごろよちばなれけわ。毎日阿弥陀経四十八巻を
よこ。念佛三萬五千遍をこなふのちよは六

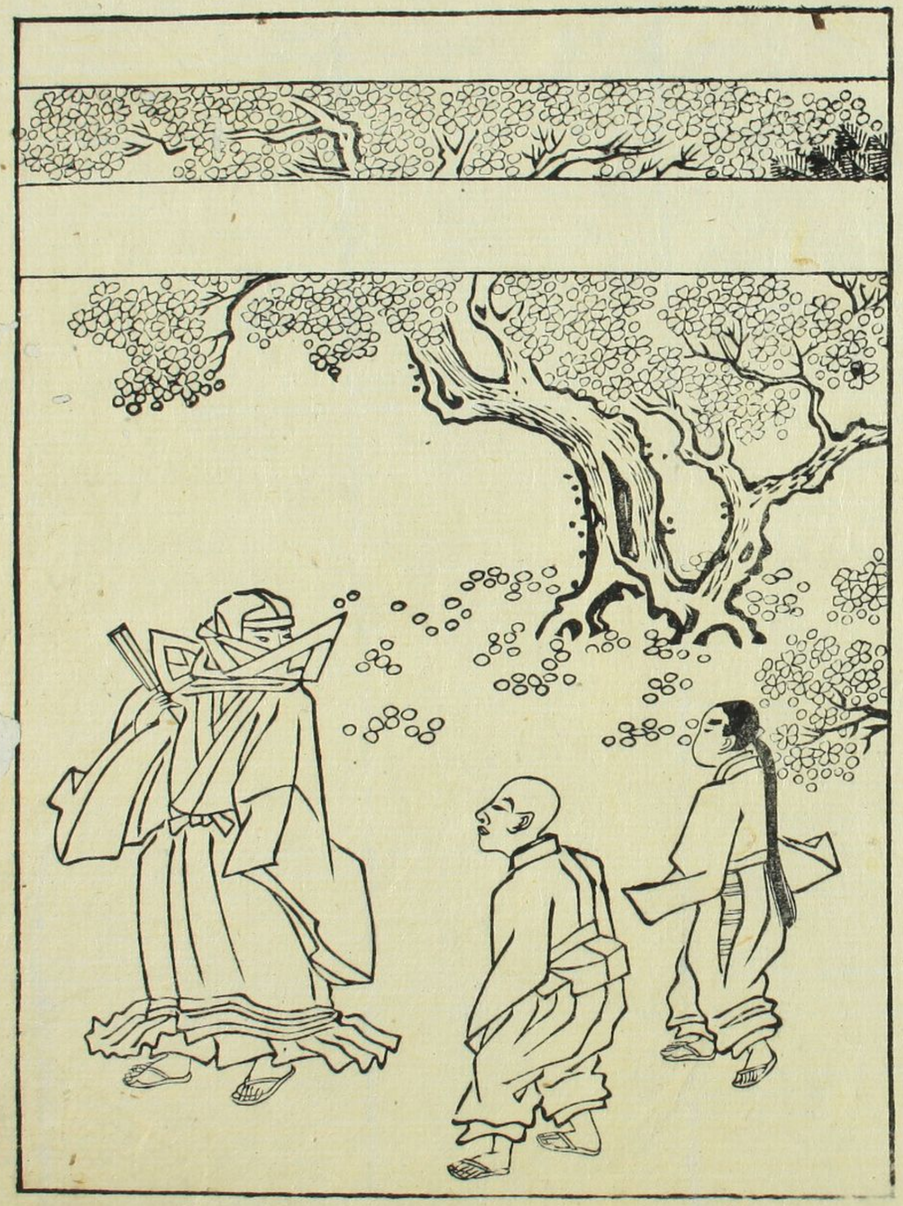
萬遍なり。或時阿弥陀経。轉讀乃事。法上人り
たづゆ中ちまなるに。源空を毎日て阿弥陀経三
巻をよこき。一巻ハ呉音。一巻ハ唐音。一巻ハ訓
なりきまつるをいまい一向稱名れほう他事
れきよりなくれなまき。四十八巻れ讀誦を
らぐんて毎日八萬四千遍の稱名をそぢてこそ
ら弥なる。若我成佛十方衆生。稱我名号下
至十聲。若不生者不取正覚。彼佛今現在世

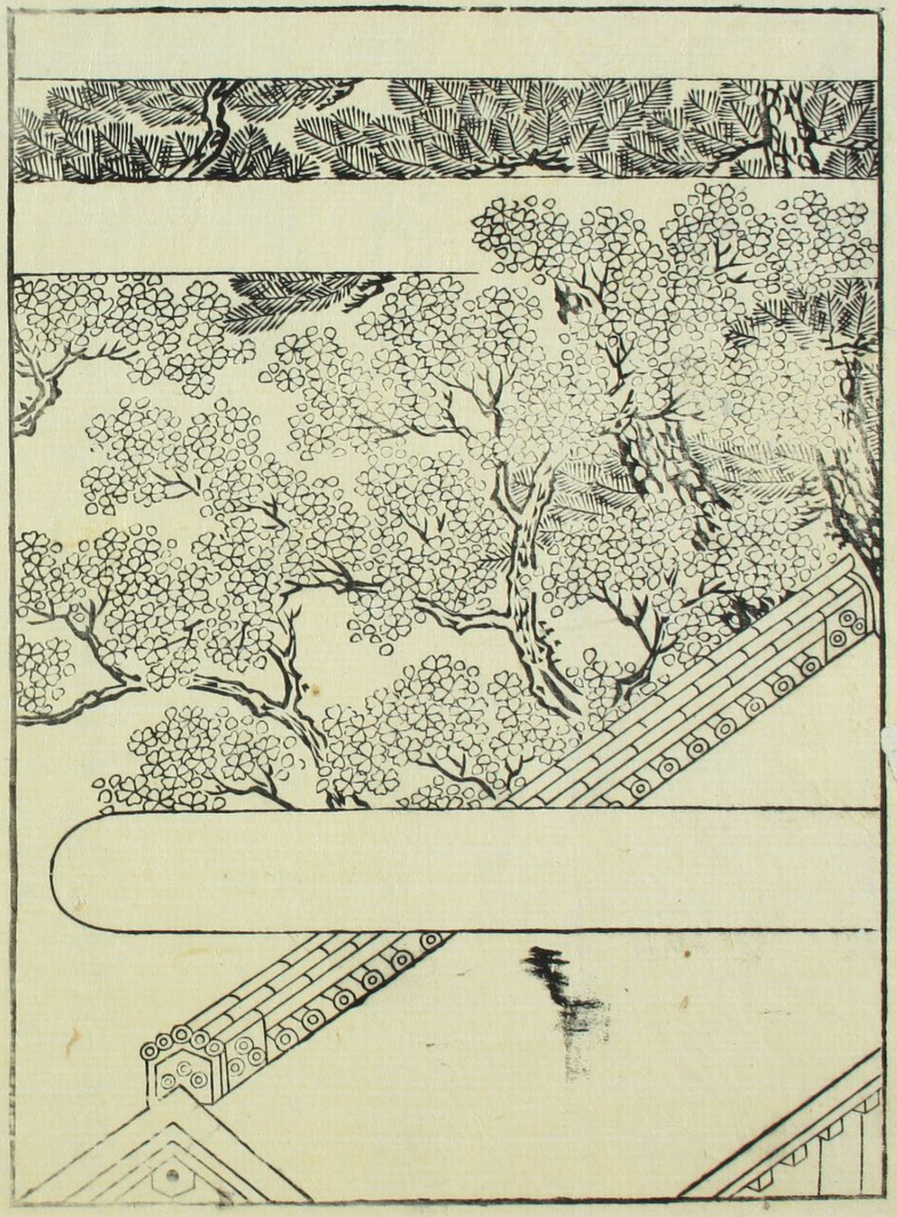
成佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生。
往生肝心此文にあるゆゑ。文字又四十八まさしく
本願のうずにあつまりぢぶんにてふつき心あ
ゑつゝて常に詞よハ。衆生稱念といぬ。ゆゑ豈
それ人よあつぢんや。必得往生といへひとり
なんぞうけ迎よをまつんゝて感涙をれぶて
うまき抑山門諸堂にはらえん。衆徒のいろひ
れく堂衆乃沙汰なりしてこの堂衆等寺

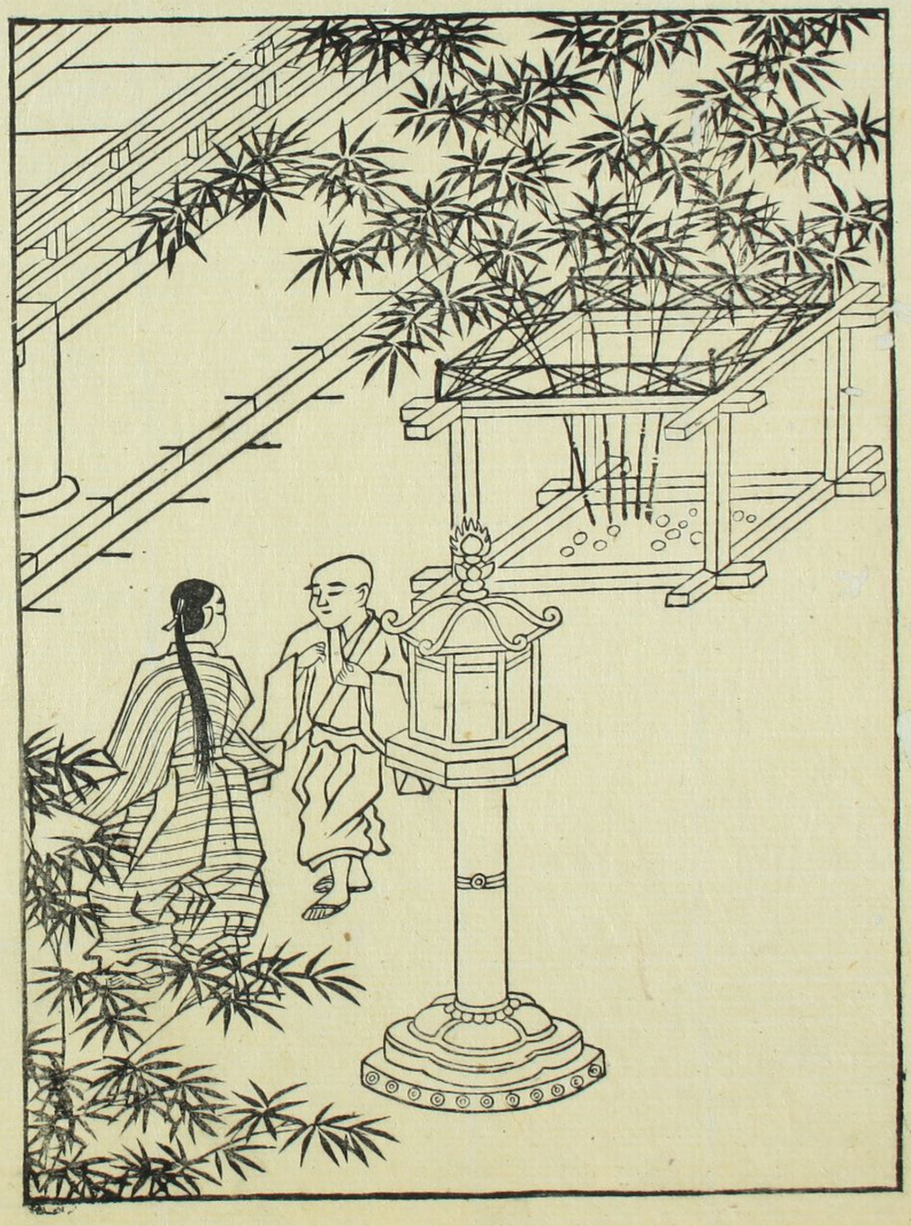
用をむさぼり。獨歩に。あまち。衆徒を忽緒し。
あまちへ八王寺乃社壇を城塚として惡行を
たくさんは建久三年冬に。官兵をさし
たうハさま。堂衆をもちゆゝれ。のちは諸
堂に安居以下。これ衆徒の沙汰よてつゝあらふ。
根本中堂の安居に結願。導師の沙汰あり
ときに。隆寛それ器量たるよ。衆議をふること
ころよ。法然房乃弟子とれ。專修念佛を行と

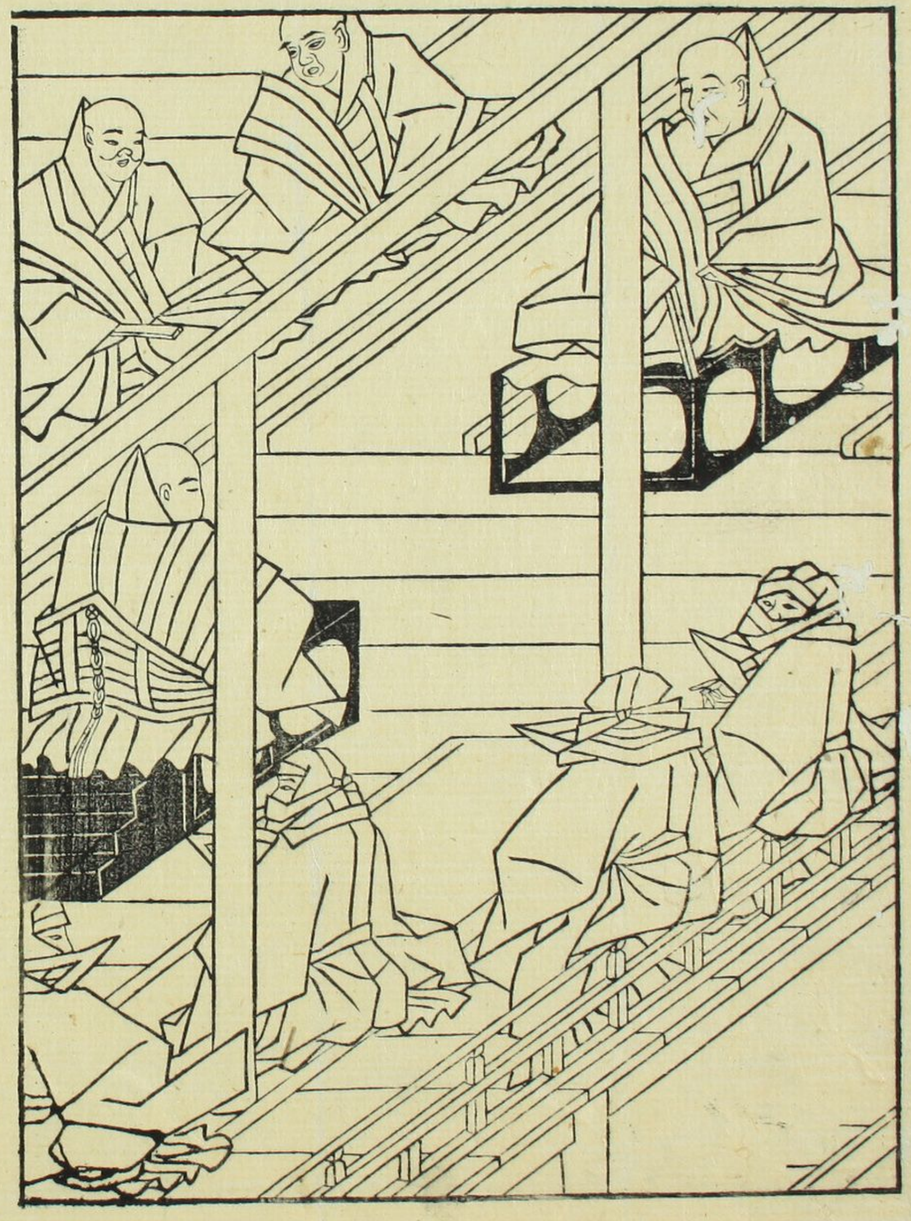
すゐうへハ吾山の唱導主つる道こゝにぞるむ。
嗟これ沙汰よをよびゝこのゝことを。拔群の名誉。
傍若無人なりしのハ異義の衆徒をたゞ免。
ほゝ招請せゝれるに。大師草創ゝめ
より未代繁昌乃今ゝいるまて。辯説た
まゝ絶ゝたまひ。衆徒感歎乃ゝ
ひゝきをれ。諸人隨喜の涙。たゝをとゝ
ほゝと賞翫のあまり。律師いまゝ凡僧なりに。

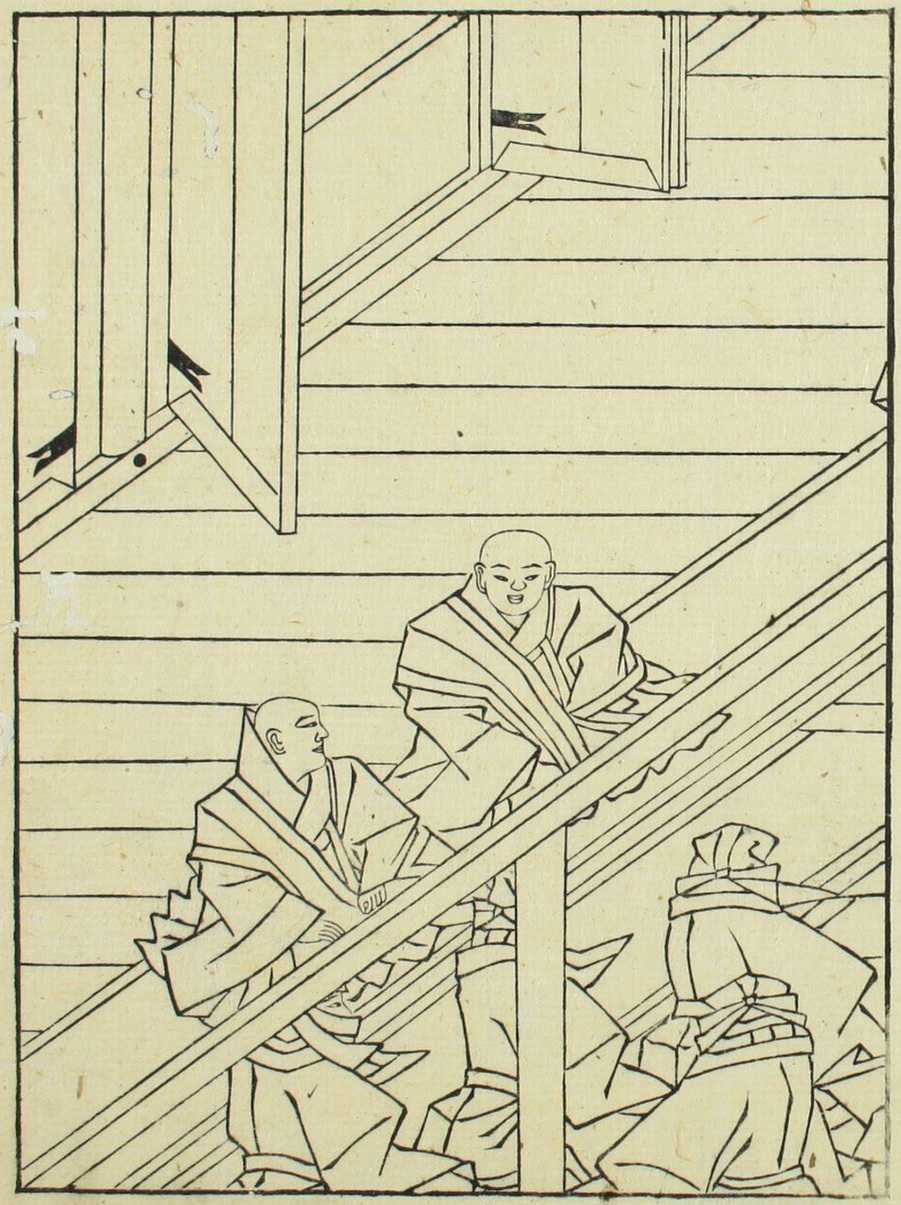
東西ハ坂を乘輿すべしとゝゆるされよ



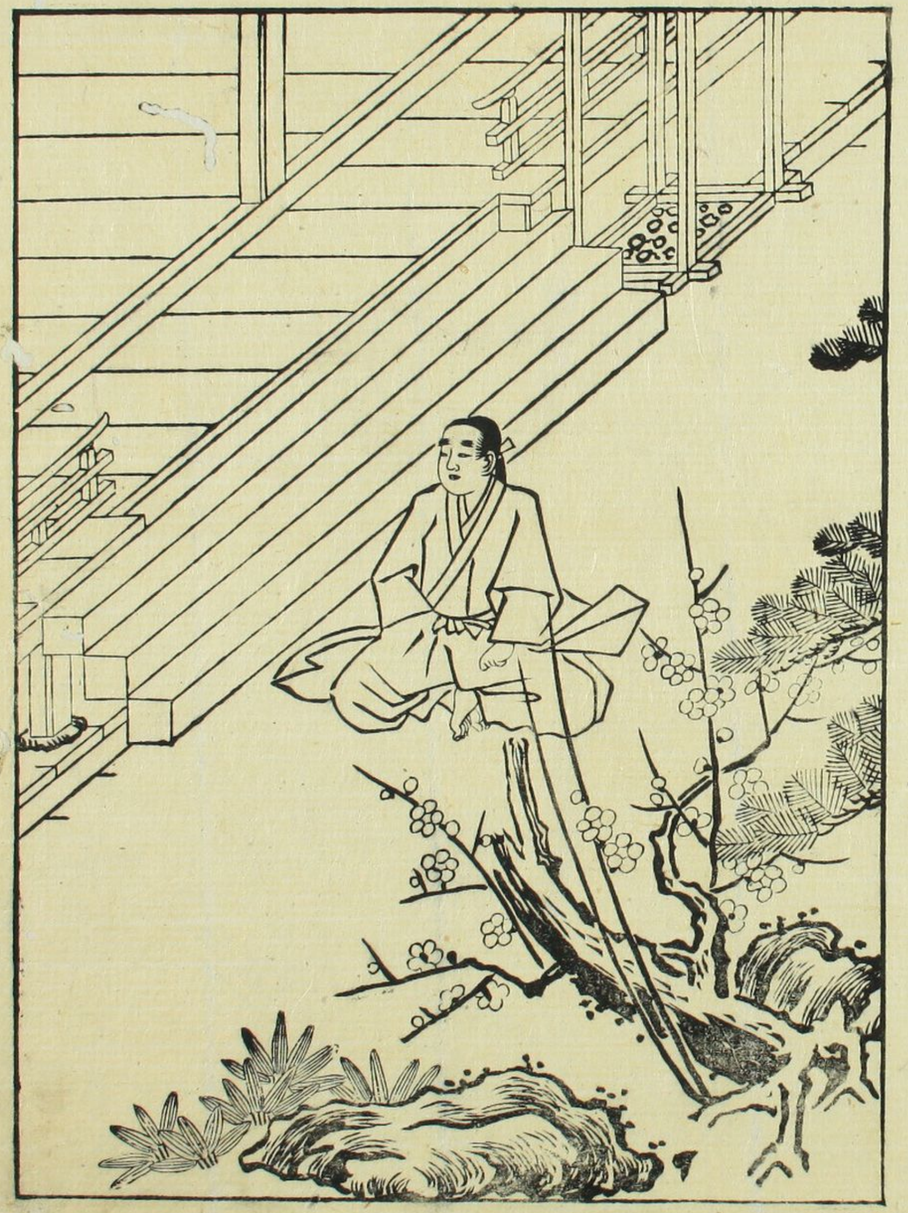


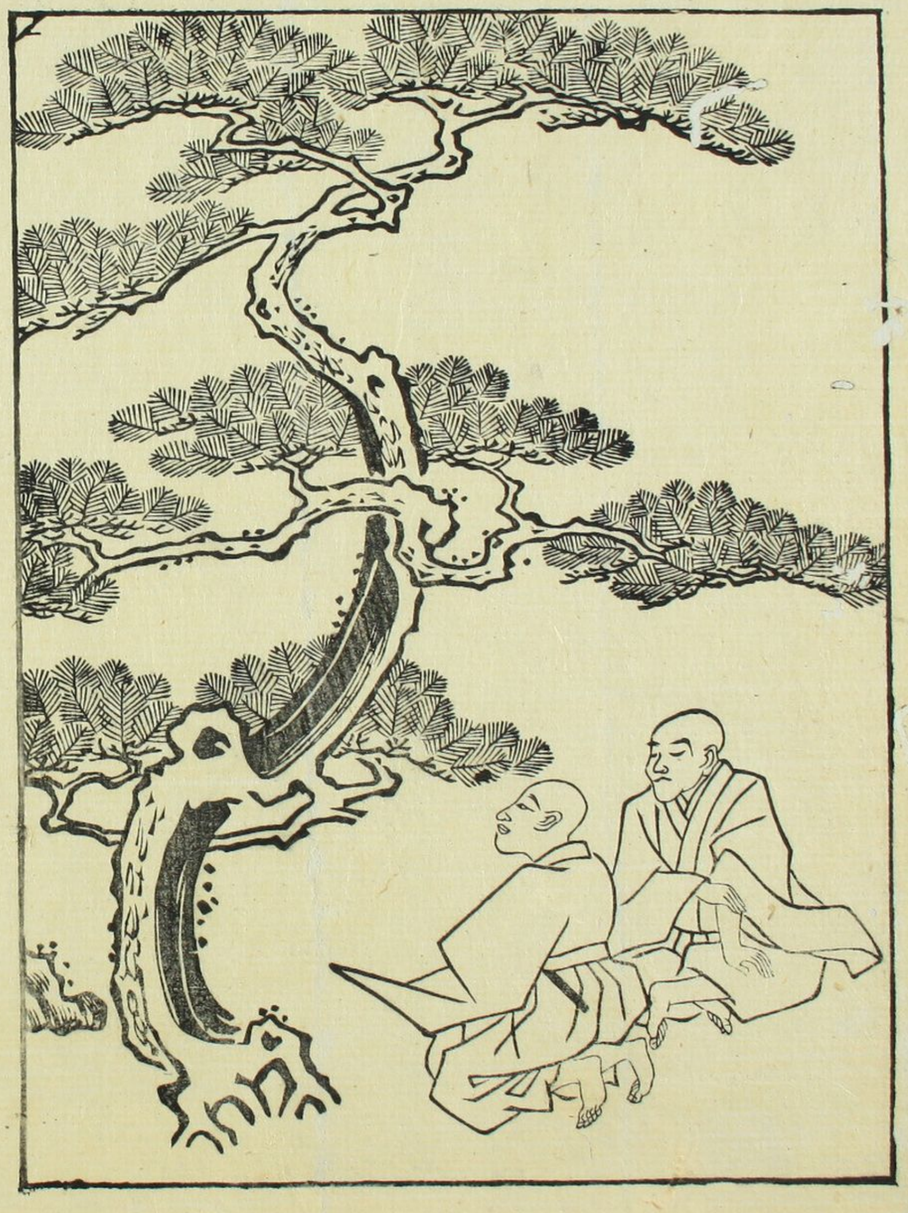






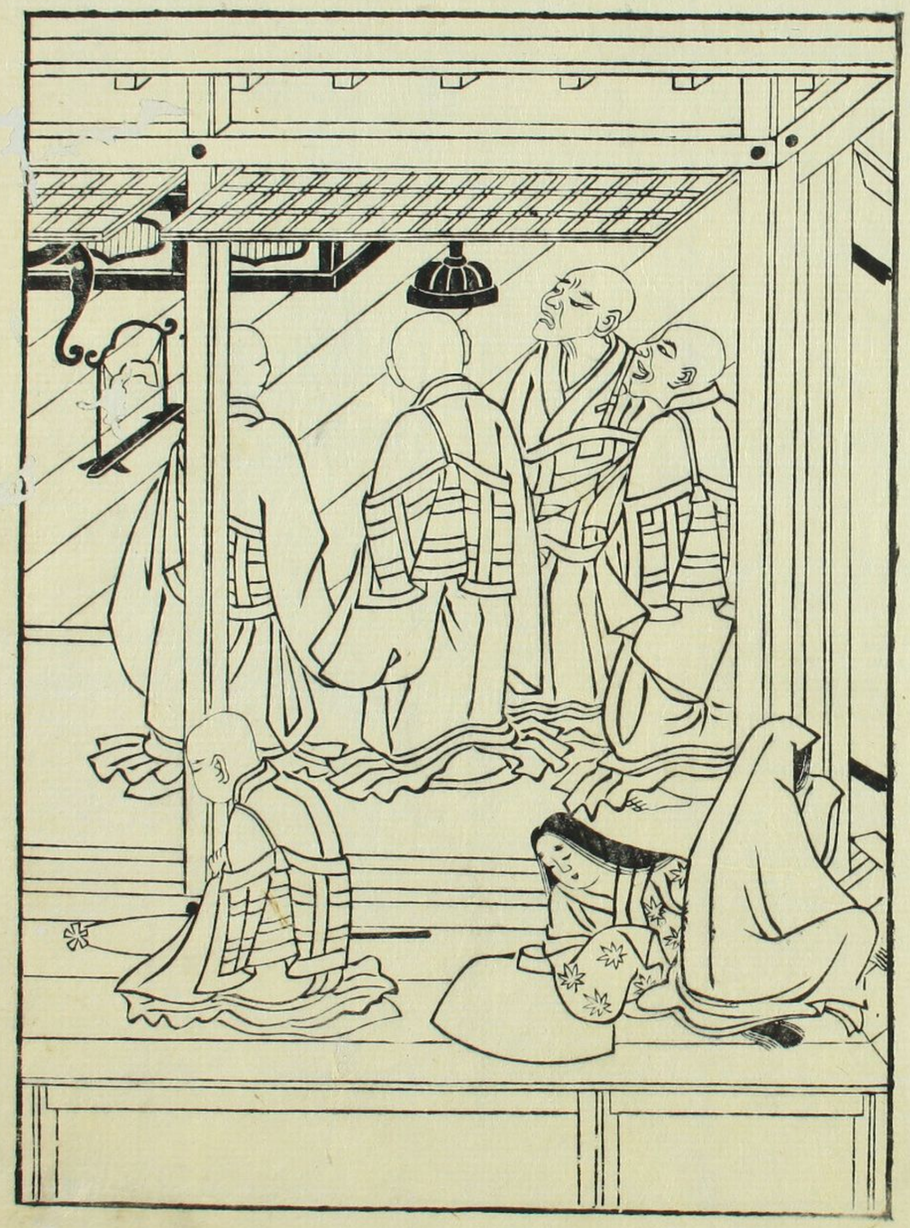
上人小松殿御堂よりわたしまゐらせこそ元久
元年三月十四日より律師參殿なるに上人後戸より
出むとし給てふところゝ一巻の書給をり
いゝてこれを月輪殿御仰よりてえらび
進ぜるところの選擇集なり。のちるところの
要文要義は善導和尚浄土宗をたてまふ
肝心なりやく書寫して披覧すべしとて
不審あるたびごとに問給きなり源宣存生の
あひだは秘して他見に及給ざる。死後の
流行は何事かあるんやこの法をれん貴命なり
うけていそぎ功徳をへんがためよりて
尊性畢蓮等に助筆せしめこれを書寫
して本をは返上せしめたまはりにこれを
披見してひとへに信仰のまことなりけ

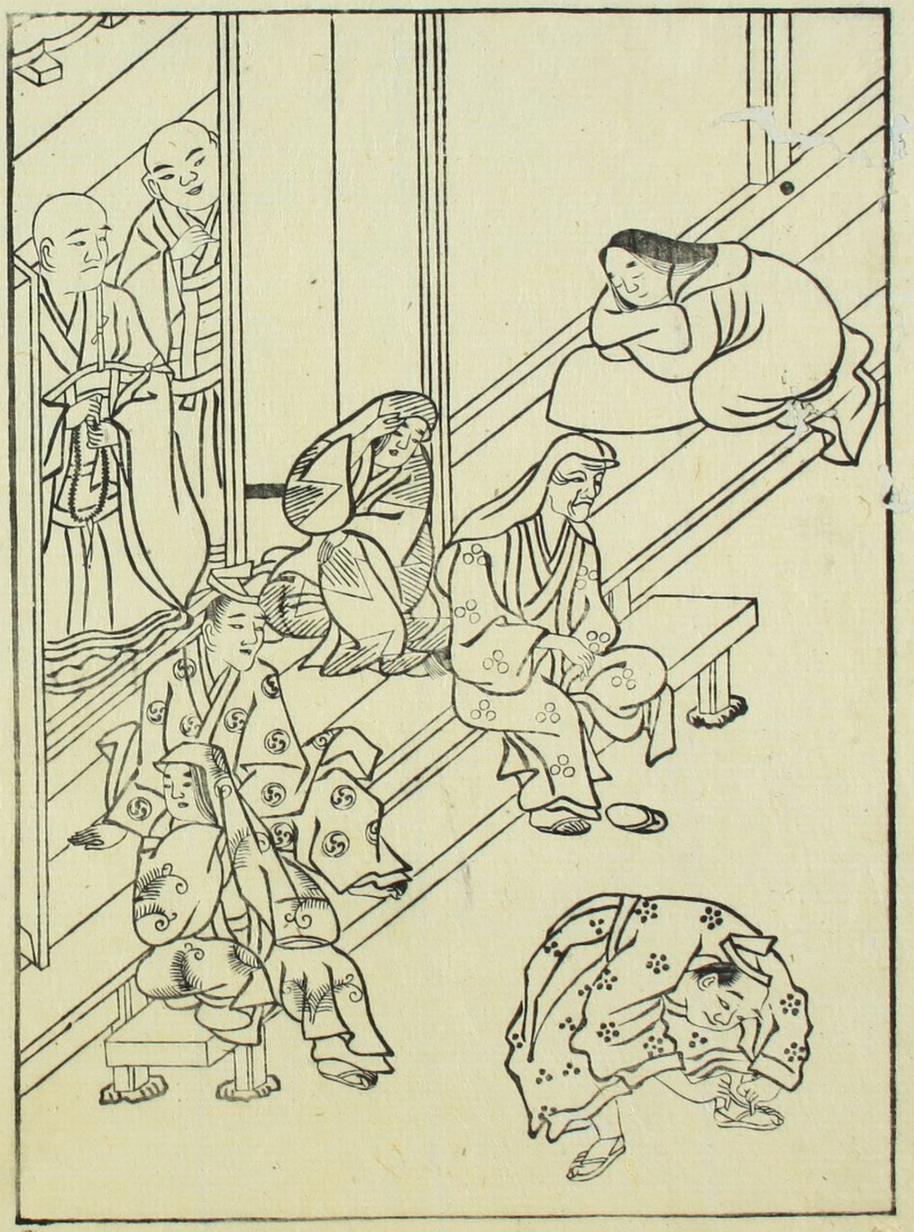




並樓の豎者定照う凶害よりて山門より
うたへ奏聞よりをよびて上人の門徒國こへ配
流せらるべしに律師そ専一にして配所さ
たまるよしきこえたれとも師上人ずでよ
念佛の事よりて遷謫よりをよひ弟子こうへ。
予その跡をくうんこと。なを本意なりとて長樂
寺に来迎房よりて寂後の別時こくゼ日の
如法念佛をしてとめらるべしに結願の日り

あらわして異香室内よりよ薫し。蓮華一茎白蓮庭上よ
生し。瑞華そらよりわぬ。わそぐりくれい。現身往生の
人ばかりそたうとひあひたるほうして不思議の
事なりけり





律師をハ森の入道西阿うけ給わって東関へ
さたしたてまつる嘉禄三年七月五日進發を
配所ハ真列とちぐ〳〵れなる浅森の入道らく
律師より歸したてまつりて秘計よって代官に
門弟實成房を配所へたつり律師をハ西阿ゟ
住所相摸國飯山へ相具したてまつる八月一日
鎌倉をたち給ひ律師飯山へうつり給ひ
のちハ森の入道尊崇いよ〳〵歸敬他事

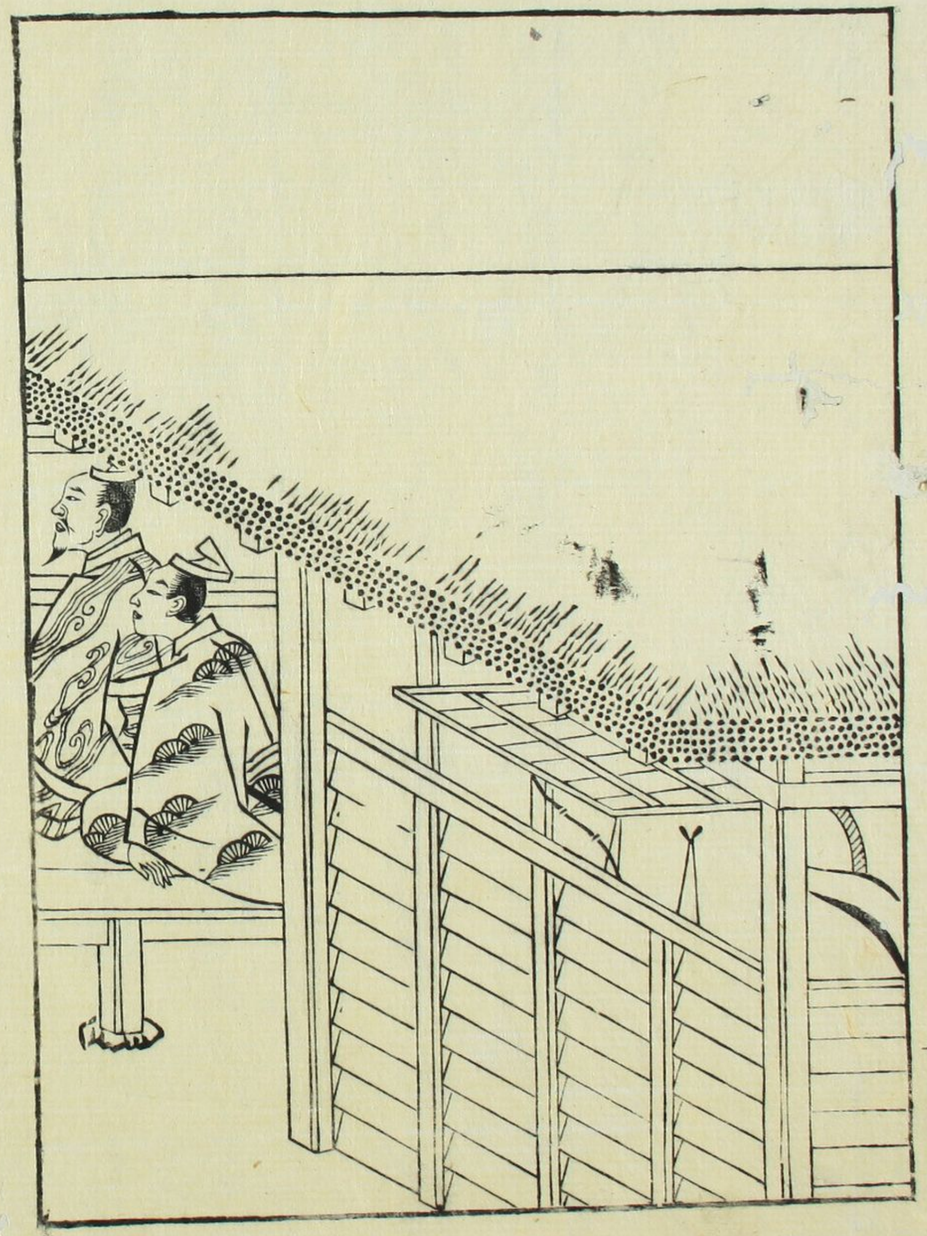
なりきぶつて同年仲冬風病よりに
をうじて病床に筆をとりて身の一期の事を
まるはしたためこまをつかくそれ
こゝにいたる我きく達磨和尚は配所にて
くさむらに跡をのこす慈恩大師は穢土の
いとわに名をとゞむ。ひとりは佛心宗の根源ぞ
ひとりは法相宗の高祖なり。大國たをとつるまで
いとんや邊土をや。上古又くれてゝいとんや

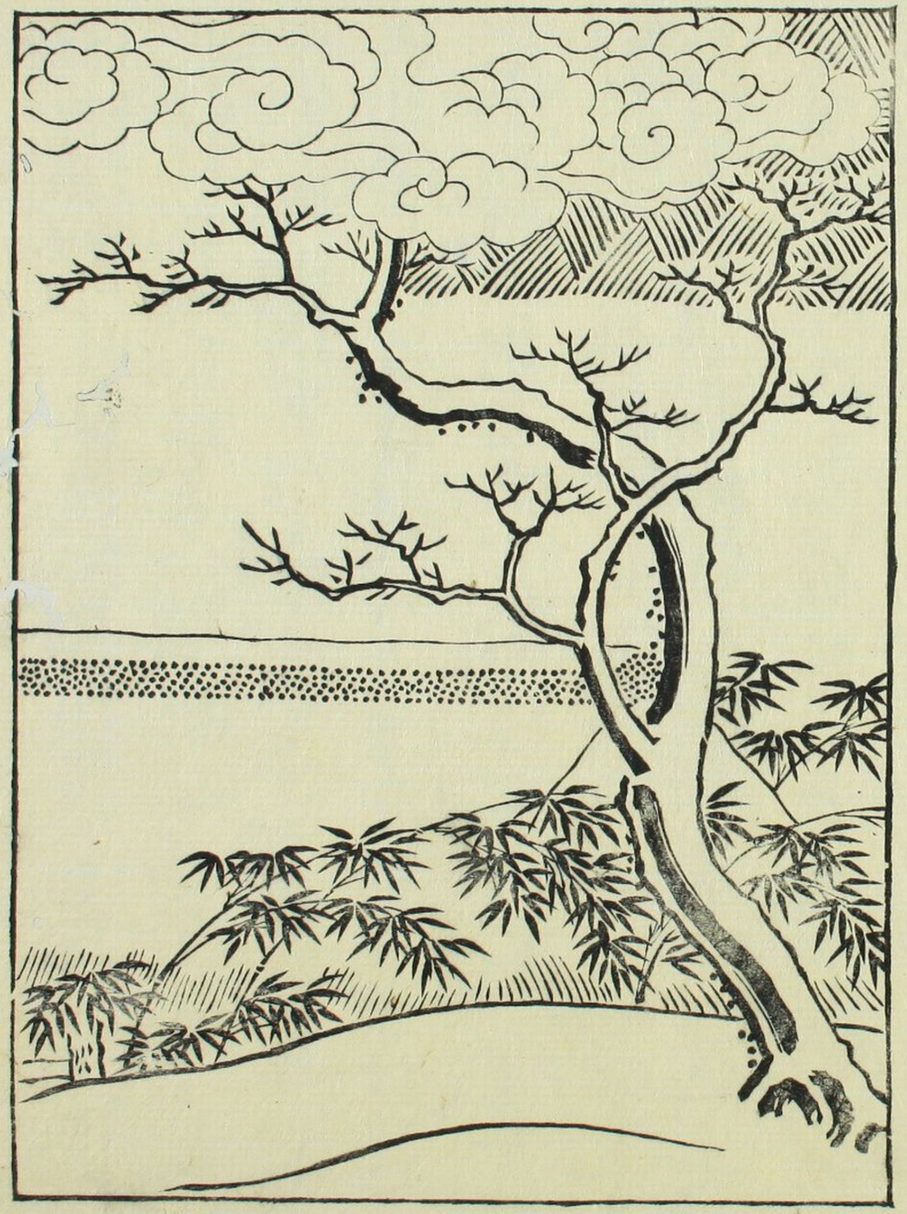
末代をや。普眼菩薩の浮生ゆめのごとし。
かの聖衆の来迎をのぞむ。更に有為の遷
變をいとまぶとて。一首を詠じたまふ

これをよく洋ともしやゝてゝいる月い
こゝろもとゞまるとしらへしてあるえ

同十二月十三日。同月廿日改元安貞元年也申時よいわく。
律師の往生すでにいとれぬ。
予の義乃邪正をも。一向專修の往生の手本

をもたくいまゐ〜いたるべきたりうして。孫陁の
三尊よむりひ。五色の糸を手にうけ。端坐合
掌し〜て。高聲念佛二百餘遍ばかり。孫陁身色
如金山。相好光明照十方。唯有念佛蒙光攝。當
知本願最為強の文を唱へたまふ。門弟正智。
唯願等。おのれ〜こゝろをこゝろへて。臨終乃一
念ハ百年の業よりすぐれたりと申たゝれそ。
こゝろをぬくゝん。本尊を瞻仰し。高聲よ
念佛し。禪定に入がごとくして。ゆくゑ
たまひぬ。春秋八十なり。彩雲軒をめぐり
異香室にみてり。音樂を聞てきこゆ。
臨終にあゝ人こゝろおかり。在世にあひるゝ奇瑞。
臨終乃きざしその靈異。つけきよりとく
のせ侍





律師鑑倉をたちて飯山へくだりたるとき。
武列刺史朝直朝臣。千時廿二歳 相模の四郎殿申
さるゝ。御霊のまへをひきて事のよし侍
申さるゝ。律師興侍うきすへさせて對面
たまふ。朝直朝臣。身は武家にむまれてわゝ
いへども。心は佛道にうけたり。孫のゝこい家業を
すてゝ。生死をはなるべき道侍をゝしへ
給へと申さるゝ。律師のたまはく。年少の

御身武家の子にはものとゝてこの御尋り
をよぶこと。宿善の内よりはもれ難へし
凡佛教多門なれども。聖道浄土の二門をい
てゝ。ゝ聖道門は有智持戒の人り
あゝ侍こゝ。これを修行をへゝ浄土門は。
極悪最下の機のためにて。極善最上の法侍は
げにこれまこゝ侍。有智無智をえゝは侍在家
出家をきゝは侍。弥陀他力の本願を信ずれば。

往生うしなひ。就中末法に入て七百餘歳。
時機相應の教行ハ。ひとへに念佛の一門たりぬ。
飛錫禪師ハ。末法にのぞて。餘行をもて生
死をいとふ。陸地に船をこぐがごとし。他力を
たのみて往生願ふ。水上に船をうかべ
ごとし。のまんかぎりハ。ひとへに名号本願の船に
のりて。彌陀如来願力師ら。釋迦發遣の
順風にほをあげて。罪障の雲をはらひ。

妄執の波をたちぬ。念願更のあひだに。
極樂世界七寶池のこぎいでうんこれ。百
即百生ひとへに疑なし。これ安心たゞひとつ
ハ。ぜんだらし戰場に命をすてゝも往生さ
あるべし。ぜんだらの弦をまもる。朝直朝臣たちまちに
真實の信心をたてゝ。毎日六万遍の念佛ハ。
一期退轉なへ。ぜんだらと誓約をなすべし。三十
餘年稱名の薫修をつみてまのあたり本尊の

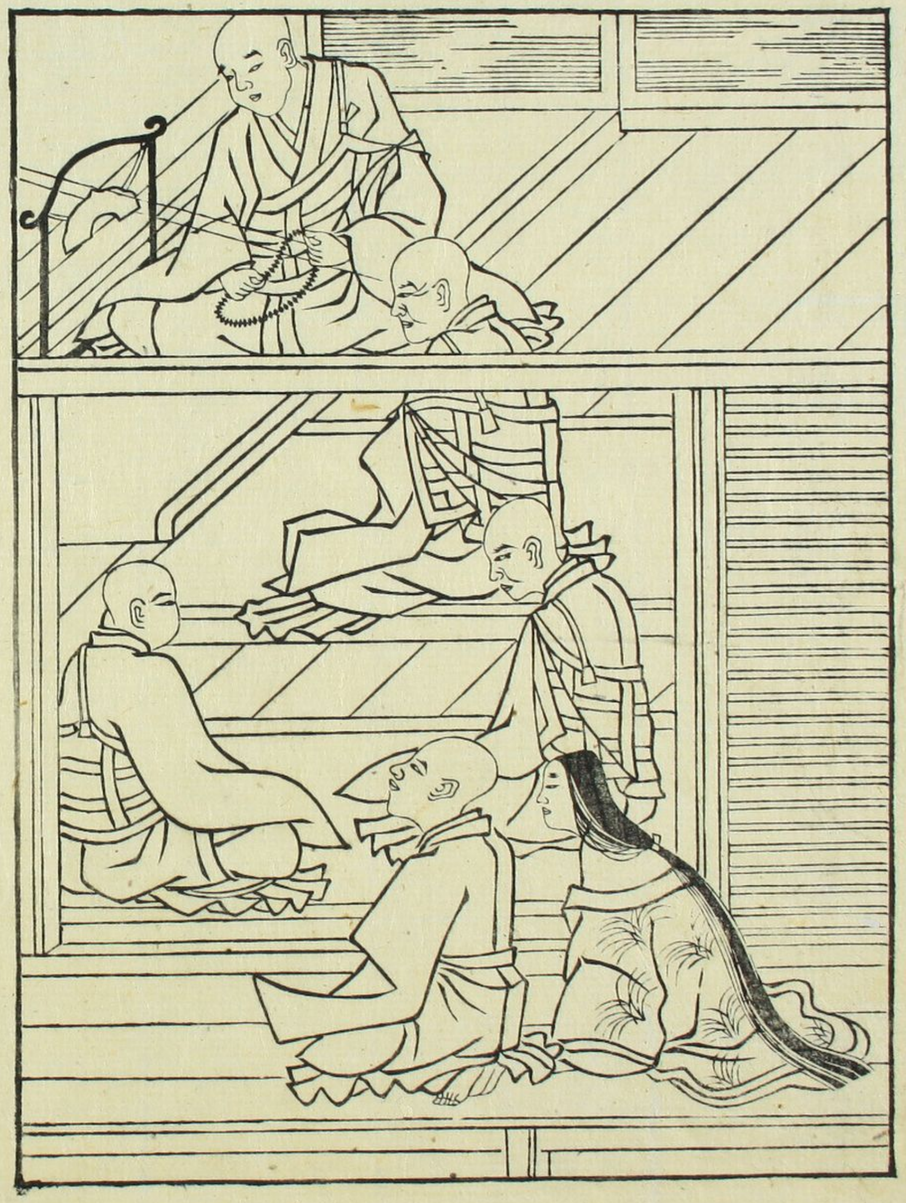
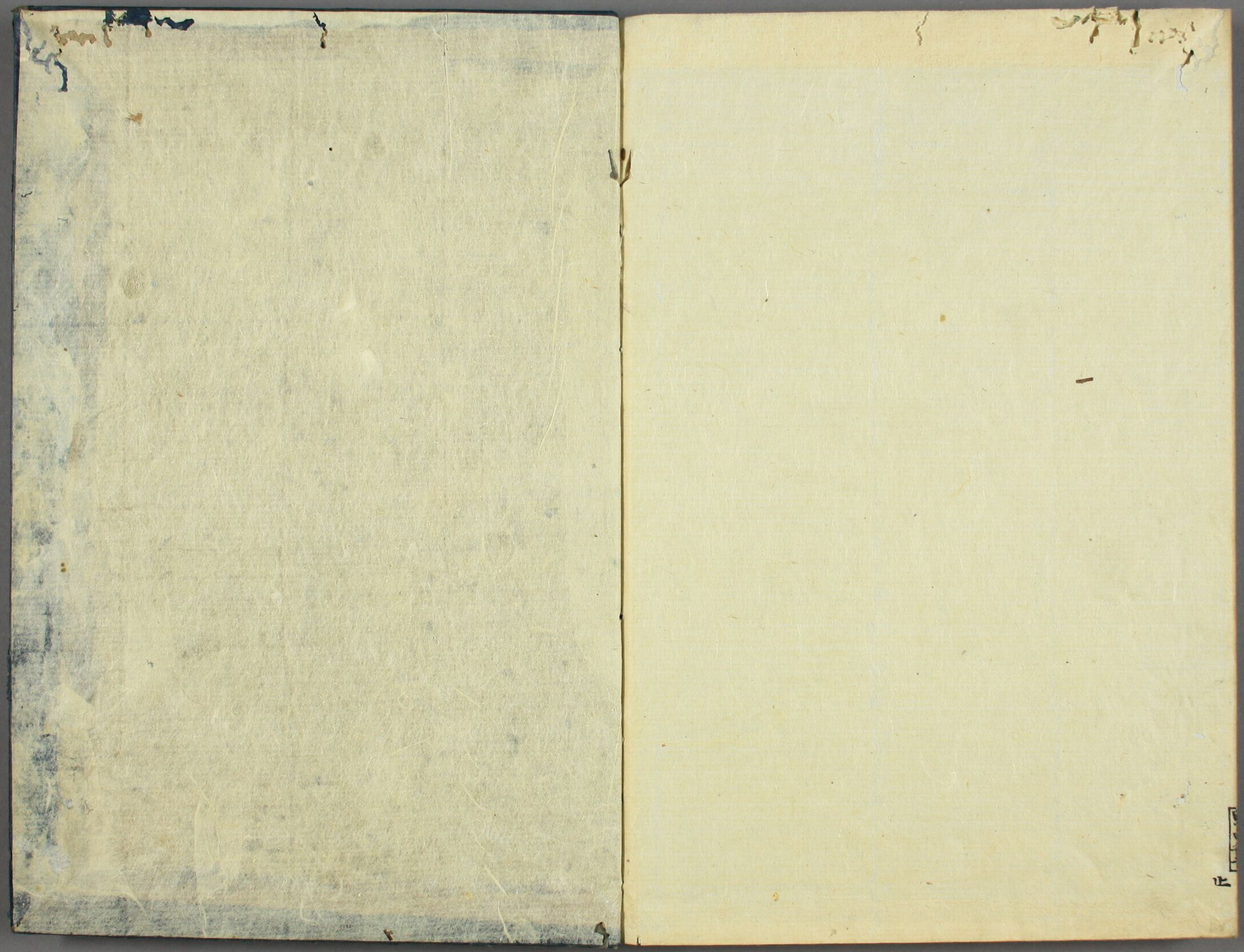
たゞ後ろうふかゝりて往生の時をまつゝ。生年
五十九歳文永元年五月一日。出家後さげ。同三日
寅剋。高聲念佛四百餘遍。體をせず。念佛のいき
よてをつゝ絶よりつゝ。これひらへる律師一言乃
勸化よりゝ。面こてたうらくぞ。れほえ侍る。九
これ律師道心純熟し。練行功たゝりて。三昧を
發得せゝれたりよや。先師上人の三昧發得して。
極樂の依正を拜したゝまひしる事をゝ申たる

ときハ隆寛を時こハゝえ侍と申されたるこの。
あゝいひしりとれをつゝれたる氣色よて。一定
風氣にて見え侍と覺侍らて申されたるこの
律師の義をゝ多念義とれゝゝ。又ハ長樂寺義
らもいへゝ。長樂寺の惣門乃うちに。居をまつゝ
らもたる故なり。兼久三年のゝ。但馬官うり
念佛往生の事御尋あゝられゝ。三箇條乃
篇目をたてゝ。申されたる利。

うけ宮の御夢想にハ法然上人隆寛律師ハ。たゞひとの師弟ならねどもに行化をたすく。浄土よりてハ。律師ハ師範上人ハ弟子。婆婆にてハ。上人ハ師範律師ハ弟子なりとそ。御覧ぜよ。

遊蓮房圓照ハ。入道少納言通憲の子。信濃守
是憲とまうす。生年廿一歳よして發心出
家をとげしかハ法華經をそらにおぼえて讀
誦しけるそののちは上人の弟子となりて
一向よ念佛をして道心堅固よ厭離の心ふかき
行者にていつとなくうらなきうぐミてもの
おもひをぞふかくてそうえける。一鋪半の淨土の
變相を圖して頸にかけてまりやすむ所ごとに

これをかけて念佛をして最後の所労の時。安居
院の聖覺法印のもとへ消息をつかはしける。
其状云。後世のたすけよハなに事をかせん
すること申候て。一向よ念佛申せとぞ御勸進
あるべく候。智者にておはしませバ。世間の人
たぶんかく尋申候りんどんとて申候也と云
法印申されけるハたゞおろかなる人ハさやうの
事申候てもなかりし人のゆくしの證をとれるる

このあるやうんとれぼつたくてぞうる中
さんとれりひ〜をぞうてうせられよ。遺眼の
こゝろ。云 舎兄修禅院の僧正信憲。人よ
うつまをうい三寸ぬ火舎よ三通の香をうりて
それ香乃えんとゆるまて合掌しく。
毎日三時高聲よ念佛するこゝひさうくたりぬ。
それあひる霊證をえたることたびくれまと。
云 云聖覚法印申さられる事。思合られたり。

西山の善峯にてをいり後ろる。名号後
となること九遍上人すえていま一遍とたかせ
らまられ。高聲念佛一遍してぞていき
るえよたわ上人はひよい。浄土ぬ法門と。遊蓮
房こにあへるこそ。人累ぬ生後うけしる。思出
よていはまこそれはせられる。厭離穢土乃
心をめく。欣求浄土の行もぞこあわたる
故よやこあわかるたうくそれかえはる。